

Hemingway 批評史の揺らぎをめぐって

岡 田 虎 之 輔

はじめに

Ernest Hemingway (1899-1961) が存命中から活発な研究・批評の対象になっていたことはつとに知られる。このロスト・ジェネレーションを代表するモダニズム作家を論じた初めての専門的な研究書は、Philip Young が発表した *Ernest Hemingway* (1952) と Carlos Baker の *Hemingway: The Writer as Artist* (1952) の二冊だった。とりわけ重要なのは *In Our Time* (1925) の複数編で描かれた Nick Adams を原型とする男性主人公を “Hemingway hero” と定義した Young の業績である。Young は、Hemingway の作品はしばしば作者の経験の色濃く反映した自伝的な側面を内包すると分析した。“He [Hemingway hero] still projects qualities of the man who created him, many of his experiences are still literal or transformed autobiography, and his wound is still the crucial fact about him” (Young 82). Young のアプローチは後続の批評に大きな影響力を誇ったものの、今日の視点から見れば、彼が言う “Hemingway hero” に当てはまらない短編作品の数々をなおざりにしているという問題点がある。他方、Hemingway 研究における伝記批評の第一人者 Baker は、ストイックなまでに史実を追求するその態度が最近でも高く評価され、今なおその信頼性を保っている (前田 18)。

こうした Young と Baker の著作に始まる Hemingway 研究の理解を深めるうえで、*The Critics and Hemingway 1924-2014: Shaping an American Literary Icon* (2015) は有益な一冊とみなすことができる。編者の Lawrence W. Mazzeno 曰く、作品の評価の推移や方法論の展開をたどり直すためには、彼が掲げた “chronological review” なるコンセプトを導入する必要がある (9)。同書を頼りに批評史を振り返るとき、Hemingway の男らしさの神話を崩壊させた死後出版作品 *The Garden of Eden* (1986) の影響は決して無視できない。しかしながら、研究者たちの関心が男性性から豊かな性の意識へと移る一方で、その時々々の批評は膠着状態にあった。Hemingway 研究には知られざる鉱脈があり、その潜在的な可能性こそが今後の研究

の原動力となるはずだ——このように結論付けた Mazzeno の議論 (230) を踏まえて、本稿では1980年代から2010年代にかけての日米の Hemingway 研究の歩みを振り返りながら、ジェンダー・セクシュアリティ批評の興隆を経た近年の研究動向が持つ批評史的意義を考察する。

1. *The Garden of Eden* の影響

Young の議論を端緒とする、男らしい作家 Hemingway の像は、1980年代半ばに公開された *The Garden of Eden* によって大きく変化した。1961年の Hemingway の死から同作品の出版まで20年ほどの年月を挟むが、この間の研究でも少なくとも1970年代後半までは、Young の“Hemingway hero”論が研究の方向性を体系化していた^①。同時代の多様な文学批評の勃興を背景に置きながらも、Hemingway 研究では男性性のテーマが長らく支配的であったことは疑いえない。しかしながら、1960年代以降の多元的な文学状況を経て出版された *The Garden of Eden* は、Hemingway 研究において根本的に新たな観点を提供し、初期の作品の徹底的な再読を促すだけではなく、作者本人の人生までもが問い直されるほどの影響を誇った (Mazzeno 78, 135)。死後出版の問題作を受けて発表された Mark Spilka の *Hemingway's Quarrel with Androgyny* (1987) と Kenneth Lynn の伝記 *Hemingway* (1987) は、いわゆる両性具有論を定着させ、直後に続くジェンダー・セクシュアリティ批評の嚆矢となった。研究・批評史にパラダイム転換をもたらした Hemingway における両性具有願望について、Spilka は次のように指摘する。

It seemed significant, nonetheless, that Hemingway had conceived of androgynous love as an edenic garden that a man must lose or its transience, and that he had returned repeatedly in his fiction to the problem of its transience, and that he had tried to explore its childhood sources and its Parisian flowering in his closing years. With that much go on, one could at least define androgyny in his life and work as a mixture or exchange of traditionally male and female traits, roles, activities, and sexual positions. (4)

Rose Marie Burwell も論じるように、*The Garden of Eden* のうちには、Hemingway の両性具有願望との長きにわたる内なる闘いを見出すことができるだろう (108)。他方で Lynn は、Hemingway が幼少期に母 Grace によって、姉の Marcelline の双子の女兒として女の子の服を着せられた経験が、彼の両性具有願望あるいは終生付きまとった性の不安の要因となったと指摘する^②。Hemingway が負った身体的な傷とトラウマを問うた Young の研究を引き継ぎつつ、その創作が裡に秘めた性の傷に着目した両性具有論は、伝記的側面から性の意識を論じる手続

きを踏むことになった。

かくして Hemingway の男性性神話を崩壊させた *The Garden of Eden* は、テキストそのものだけでなく、その出版、そして編集に至るまで様々な問題を孕んでいた。出版者の Charles Scribner Jr. の序文によれば、原稿の状態では不完全だった第 2 部のみ大幅な編集が施され、前半部分にはささいな編集を加えられたことから、テキストが完全に調和し、首尾一貫した物語になったという (*The Garden of Eden* vii)。また編集を担当した Tom Jenks が同作の論集に寄せた “*The Garden of Eden at Twenty-five*” で弁解したところでは、「ささいな編集」という表現はさまざまに解釈される可能性があり、どれだけの要素が省かれたかを定量化するものではない (10)。Jenks の編集は、20万語以上あった原稿を 7 万語にまで減らしたうえ、作中のエピソードを数多く削除したことで、研究者のみならず一般読者をも困惑させた悪行として批判された (Wagner-Martin 226)。おそらく Jenks は、この種の批判を認識していたのであろう。にもかかわらず、彼は 1986 年の講演で、刊行されている *The Garden of Eden* は総じて高く評価され、少なくとも明晰さの点では優れたものになったと言い放つ。そして一切の質問や問い合わせには応じないと明言し、その後は頑なに口を閉ざした (フェアバンクス 90)。こうした編集上の不確かさを持つとはいえ、*The Garden of Eden* が研究者たちにとり、*A Movable Feast* (1964) や *Islands in the Stream* (1970)、そして *True at First Light* (1999) といった他の Hemingway の遺作にはない魅力を持っていたことだけは確かだ。前述の Jenks の寄稿も含んだ論集 *Hemingway's The Garden of Eden: Twenty-Five Years of Criticism* (2012) は、死後出版の作品を単体で取り上げた唯一の論集であり、その存在自体が、*The Garden of Eden* が Hemingway 批評における性と人種の問題を前景化した重要な作品であったという事実を雄弁に物語っている。

2. 問われ続ける性

前述した両性具有願望をはじめとする、Hemingway の性の意識を問うた一連の研究の到達点になったのが、Nancy R. Comely と Robert Scholes の *Hemingway's Genders: Rereading the Hemingway's Text* (1994) と、Debra A. Modellmog の *Reding Desire: In Pursuit of Ernest Hemingway* (1999) である。両者はともに Hemingway の性と人種の表象の特異性を議論の中心に据え、それらがいかに作品に影響を与えているのかを論じる。Modellmog は両性具有論について、次のように批判的に論じた。

More frequently, the sexism and heterosexism are inherent in the paradigm of androgyny that these critics use to explain the gender complexities in Hemingway's life

and work. One might say, then, that the attitudes are institutional more than personal, although one could also argue that critics have chosen this paradigm because such attitudes are ingrained within it. (30)

Hemingway 研究におけるポスト両性具有論として、性の表象の問題意識を引き継いだジェンダー・セクシュアリティ批評が勃興したと言える。^③これらの研究は JFK 図書館での *The Garden of Eden* の原稿調査を前提としていた。その理由は、Jenks の編集で削除された部分に、性や人種の表象の特異性が見られるエピソードが多く含まれていたことにある。Hemingway が晩年に残した原稿の繋がりを見出し、それらをいわばメタテキストとして順番に読むと、自身の創造力の衰えと対峙する Hemingway の苦闘が浮かび上がってくる (Burwell 1, 10)。このことを論じた Rose Marie Burwell の *Hemingway: The Post War Years and the Posthumous Novels* (1996) は、この時期の草稿研究の特筆すべき成果であった。

ポスト両性具有論の重要な成果としては、Thomas Strychacz の *Hemingway's Theaters of Masculinity* (2003) を挙げておこう。Strychacz 曰く、Hemingway の伝記を知る読者の大半は、彼が男らしい行動を真に体現していると決め込んでいる。こうした読者にとって Hemingway は理想的な男性的役割の模範、あるいは、男性性、激しいスポーツ、身体的暴力、戦争を賛美することに没頭した作家である (3)。さらに、作品内で男らしさが描かれるとき、そこには必ず観客が存在することで演劇的な構造が見られると論じる (8)。このような構造を踏まえて男らしさを再評価する Strychacz のアプローチは、ジェンダー・セクシュアリティ批評が中心となった中でも新たな研究視野を拓く先駆けとなった。前述の Modellmog や Comely と Scholes らの研究を踏襲したものとしては、他にも Amy L. Strong の *Race and Identity in Hemingway's Fiction* (2008) と Tania Chakraverty の *Ernest Hemingway and the Fluidity of Gender: A Socio-cultural Analysis of Selected Works* (2023) があるが、演劇性という新機軸を打ち出した Strychacz とは対照的に、この二冊の議論は既視感に苛まれる部分が散見され、Hemingway における性的・人種的アイデンティティの問い直しそれ自体が今や常套句と化した感さえある。^④

むしろ Modellmog や Comely と Scholes 以降の研究で新たな観点を提供したのは、身体観を論じた日本の研究者によるものだった。高野泰志の『引き裂かれた身体——ゆらぎの中のヘミングウェイ文学』(2008) では、Hemingway が旧弊なヴィクトリア朝的価値観を持つ両親の教育を受けた一方で、モダニズムやジャズ・エイジといった二十世紀の新しい価値観が生まれた激動の時代の当事者として創作をしてきたことを踏まえて、彼が新旧の価値観の間で揺らぎ、葛藤を抱き続けた作家であることを指摘した。同書ではまた、1980年代から続くジェンダー・

セクシュアリティ批評を踏襲し、Hemingway の作品の女性登場人物の出産能力と、髪の毛の長さの表象に関連性を見出すとともに、対象作品の執筆時期の社会や文化、技術のコンテクストに照らした身体論が展開されている。さらに言えば、古谷裕美は『逸脱した身体——権力・棄却・ジェンダー』（2022）において、Julia Kristeva が定義したアブジェクションの概念を軸に、Judith Butler や Michael Foucault といった論者のジェンダー論を援用しつつ、Hemingway の性意識と身体論を見事に繋いでみせた。

3. *The Old Man and the Sea* の政治性と FBI ファイル

ここまで見てきたような1960年代から2010年代にかけて Hemingway の性あるいは人種の問題を論じた先行研究に対するオルタナティブとしてあらためて注目したいのが、作家と同時代の文化的・政治的コンテクストに照らした研究、特に冷戦初期の国際政治情勢を背景に晩年の Hemingway の姿を見つめなおすというアプローチである。徹底的な再読が進められる中で刊行された *Hemingway in Context* (2013) や *The Critics and Hemingway 1924-2014* でさえも、Hemingway の生涯と文学芸術を扱いながらも“Cold War”に章もしくは節を割いてはいなかった。他方で Hemingway の創作に強く影響を与えた要因たる戦争を扱う研究が、いまだに多数あることを忘れてはならない。これら二点を踏まえて Hemingway 研究におけるジェンダー・セクシュアリティ批評の興隆を批判的に振り返ると、きわめて恣意的なテーマの選択がなされており、冷戦研究の視座を取り入れた再評価は長きにわたって周縁に置かれてきたことがわかる。すなわち冷戦作家としての Hemingway 研究は、批評史の空白だと言えるのではないだろうか。

冷戦初期の歴史的コンテクストに照らして晩年の Hemingway の文学的営為を見つめなおすとき、まず思い起こすべきは1952年に出版された *The Old Man and the Sea* である。Hemingway は同作発表直後、Bernard Berenson へ宛てた1952年9月13日付の手紙に次のように書き記した。

Then there is the other secret. There isn't any symbolysm (mis-spelled). The sea is the sea. The old man is an old man. The boy is a boy and the fish is a fish. The sharks are all sharks no better and no worse. All the symbolism that people say is shit. What goes beyond is what you see beyond when you know. A writer should know too much.

(*Selected Letters* 780)

島村法夫はこの一節を踏まえて、「読者がいかなる先入観も持たずに素直に作品と向き合えば、

自ずと本書の精髓、もしくは彼の文学の到達点を感じ得るということではないのか」と問うた(31)。Hemingwayの手紙と島村の分析に鑑みれば、*The Old Man and the Sea*は非政治的な作品だと言えるのかもしれない。しかしながら作品の発表時のコンテキストを念頭に置いたとき、同作が米ソ冷戦下で出版されたことや、アメリカを代表する作家 Hemingway がキューバを物語の舞台に選んだことなどから、その物語の政治的無意識を見つめなおすことが可能となるのではないか。*The Old Man and the Sea*が隠蔽しつつも開示する文化と政治の共犯関係にあらためて光を当てた塚田幸光の近年の議論(225-47)の前提となっていたのは、このテーマに先鞭をつけた宮本陽一郎の論考(309-32)だった。一方で比較的最近の英語圏においては、宮本が試みた Hemingway における「神話的なテキストの生成と、そしてそれに対するきわめて『自然な』読みの背後にある政治的無意識の解明」(310)を後押しするかのよう、Alex Vernon が性の表象やアイデンティティをめぐる諸問題と戦争との関連性に着目している。こうした *The Old Man and the Sea* の冷戦小説としての再読をさらに敷衍するための手がかりを探る試みとして、ここでは Hemingway が FBI の調査対象であったという事実を踏まえて、その晩年の創作をめぐる冷戦コンテキストの輪郭をなぞっておきたい。^⑤

Hemingway に共産主義者の疑いを向けた FBI の調査は、中断を挟みつつ1942年から死後13年経過した1974年まで続けられた。高野は、2004年に日本の若手研究者を中心に「FBI ファイル解読プロジェクト・チーム」を立ち上げてファイルの一覧をまとめている(「ヘミングウェイと FBI ファイル」235-40)。その結果として、Hemingway の死後、無数に出版された粗雑な伝記でさえ FBI が収集したファイルよりは正確であることが判明し、ファイルの正確さと正当性が問い直された(210-11)。高野によれば、ファイルの中身よりも FBI の調査の手法そのものによって Hemingway が被った影響を推測する方が自然である。だとすれば、FBI は密かに監視をしていたのではなく、Hemingway に、自身が調査対象であることを自覚させる体制を取ったのではないか。言い換えれば、自分が監視下にあることを常に Hemingway に意識されることこそが、FBI の目的だったのではないか。高野はこうした問いを読者に投げかけるとともに、Hemingway が歴史と政治闘争の犠牲者であったと結論付ける(231, 233)。^⑥

このように FBI ファイルそれ自体は、信憑性に欠けるものであり、伝記研究で報告される域を出るものですらない。しかしながら、この機密文書のテキストのみならず、その政治社会的なコンテキストの歴史的意義を問い直すことで、FBI の圧力が Hemingway の行動や創作に与えた影響を再読することができるのではないだろうか。そうした可能性を示す端的な例として、ここでは1959年11月6日付のファイルの一部、Hemingway がキューバで受けたインタビューの返答を取り上げよう。

- 1) His opinion of the Revolutionary Government was unchanged since January he supported it and all its acts completely, and though it was the best thing that had ever happened to Cuba.
- 2) He had not believed any of the information published abroad against Cuba. He sympathized with the Cuban Government, and all our difficulties.
- 3) Hemingway emphasized our, and was asked about it. He said that he hoped Cubans would regard him not as a Yanqui (his word), but as another Cuban. With that, he kissed a Cuban flag which was nearby. He refused to report the gesture for photographers, saying that he “had kissed the flag with sincerity,” implying that publicity would cheapen the act.
- 4) Hemingway said he knew nothing about any recent note from the American Government to the Cuban Government on relations between two countries. He said that he had come from New York, where they “knew nothing about Cuba or the world. There all they talk about is Van Doren and the scandal of the TV quiz shows.”

(Federal Bureau of Investigation [underline added])

Hemingway がキューバ国旗に口付けをしたエピソードは広く知られているが、このファイルの報告に鑑みると、このアメリカの国民的作家にとっていかにキューバが重要な場所であったのかをうかがい知ることができる。言うまでもなく、FBIにとって——ひいては、アメリカ社会にとって——国民作家が共産主義へ、冷戦時の敵対国であるキューバに傾倒するのは受け入れがたいことだった。ここで重要なのは、宮本がいみじくも指摘するように、Hemingway 批評史においては作家と Fidel Castro との関係性が「半ば意図的に隠蔽された印象さえある」(310) という事実である。1980年代以降の遺稿の出版と、研究者たちの性意識への強い関心も、キューバや Castro 政権を論じることの周縁化を助長した。

Castro は *The Old Man and the Sea* の有名な一節、すなわち Santiago が言う “man is not made for defeat [...] A man can be destroyed but not defeated” (80) を引用して、Norberto Fuentes のインタビューに「これは、われわれのためのメッセージであり、ありとあらゆる時代においてたたかう人々の叫びであり、彼の文学的主張なのだ」と答えた (フエンテス 300)。こうした同時代のキューバにおける Hemingway に対する熱烈な歓迎が、作家の祖国にとってネガティブな意味を持ちえたことは言うまでもない。もちろん、FBI の調査の質には議論の余地が残るだろう。だが反米行為に対する牽制たる FBI の調査を念頭に置くことで、Hemingway

の作品、あるいは作家本人が、冷戦時におけるアメリカとキューバ双方にとっていわば文化兵器のように扱われていたという冷戦文化史的な事実を見つめなおすことができるのではないだろうか。

おわりに

批評の変遷を経ても、Hemingway 研究における「性」という主題——Young を端緒とする男性性から、死後に問われる豊かな性——は、常に重要なテーマとして研究者の間で共有されてきた。従来の Hemingway 研究は性や人種の境界を越えることから越境性を問うが、冷戦のコンテキストから論じること、国・地域を越境する Hemingway の姿をさらに検討していくことができるだろう。伝記研究者たちが政治的なテーマを扱うことが少なかった要因は、Hemingway の政治的態度が曖昧であるがゆえに、そのカテゴリー化や影響源の調査に困難が生じるという問題にあったと推察される (Fleming 295)。また、Hemingway とキューバの関係性については、同国とアメリカとのあいだで共有された秘密と疑惑よろしく、いまだ不明な点が少なくない (Putnam 333)。このように論じた Robert E. Fleming や Ann Putnam に倣えば、複数の戦争体験やアメリカ国内の政治動向といった複雑な背景も、Hemingway の伝記の政治的側面が研究者たちのあいだで等閑視されてきた理由なのだろう。しかしながら Hemingway の政治性それ自体もまた、徹底的に紐解かれていくべき観点の一つであることはまず間違いない。

Hemingway とキューバ、そして政治性について考えるとき、当時の大統領 John F. Kennedy が発表した追悼文は極めて示唆的である。

Few Americans have had a greater impact on the emotions and attitudes of the American people than Ernest Hemingway.

From his first emergence as one of the bright literary stars in Paris during the twenties—as a chronicler of the “Lost Generation,” which he was to immortalize—he almost single-handedly transformed the literature and the ways of thought of men and women in every country in the world.

When he began to write—the American artist had to look for a home on the Left Bank of Paris. Today, the United States is one of the great centers of art. Although his journeys throughout the world—to France, to Spain and even to Africa—made him one of the great citizens of the world, he ended life as he began it—in the heartland of America to which he brought renown and from which he drew his art.

(Kennedy [The statement was released at Hyannis Port, Massachusetts. July 2, 1961.])

この一節で Kennedy は、Hemingway が20年以上も住んだキューバに——おそらくは意図的に——言及していない。言い換えれば、亡き国民的作家を悼む大統領の言葉のうちには、キューバの影が抑圧されているのだ。当時のアメリカにとって、Hemingway とキューバの関係はいわばタブーとしての意味を持ちえた。そしてまた、そのような認識が、冷戦期を生きた Hemingway の批評家たちの間でも無意識のうちに共有されていたのではないだろうか。この意味において、Hemingway のアメリカニズムを強調してやまない Kennedy の追悼文は、作家の死そのものを再利用したアメリカの冷戦プロパガンダに他ならない。

本稿を結ぶにあたり、Hemingway の政治信条がうかがえる手紙の一節を引用する。“I cannot be a communist now because I believe in only one thing: liberty. [...] I believe in the absolute minimum of government. [...] A true work of art endure forever; no matter what its politics” (*Selected Letters* 419). これはソ連の批評家、翻訳家の Ivan Kashkeen に宛てた1935年8月19日付のものである。ここで Hemingway は、Kashkeen に対して自身の政治意識の希薄さを伝えようとしている。だが、このように自身の政治的無関心を強調する作者の主張を冷戦コンテキストに照らして読みなおすことで、作家の発言それ自体によって作品の政治性が際立つという逆説が明るみに出る。Castro は Fuentes によるインタビューにおいて、*For Whom the Bell Tolls* (1940) についても、「いまだから言えるが、あのヘミングウェイの小説は、わたしがパティスタの軍隊に対する戦術を策定するのに役立った本の一冊だった」と語っていた (フエンテス 182)。Hemingway の作品をアメリカとキューバ双方にとってのイデオロギー装置として見なおすとき、そこに浮かび上がるであろうこの20世紀文学の巨匠の冷戦作家としての新たな側面は、研究・批評の空白を埋める重要な手掛かりとなるはずだ。

参考文献

- Baker, Carlos. *Ernest Hemingway: A Life Story*. Scribner's, 1969.
- Burwell, Rose Marie. *Hemingway: The Postwar Years and the Posthumous Novels*. Cambridge UP, 1996.
- Chakraverty, Tania. *Ernest Hemingway and the Fluidity of Gender: A Socio-Cultural Analysis of Selected Works*. Routledge, 2023.
- Comely, Nancy R., and Robert Scholes. *Hemingway's Genders: Reading the Hemingway's Text*. Yale UP, 1994.
- Federal Bureau of Investigation. *Ernest Hemingway FBI Files (The Full F.B.I Vault File)*. 2022.
- Fetterley, Judith. “Hemingway's ‘Respectful Cryptogram.’” 1976. *Critical Essays on Ernest Hemingway's A Farewell to Arms*, edited by George Monteiro, G. K. Hall, 1994, pp. 117–29.

- Fleming, Robert E. "Politics." Modellmog and del Gizzo, pp. 287-96.
- Hemingway, Ernest. *A Movable Feast*. Scribner's, 1964.
- . *For Whom the Bell Tolls*. Scribner's, 1940.
- . *The Garden of Eden*. With a preface by Chales Scribner Jr., Scribner's, 2003.
- . *In Our Time*. Boni & Liveright, 1925.
- . *Islands in the Stream*. Scribner's, 1970.
- . *The Old Man and the Sea*. 1952. Arrow Books, 2004.
- . *Selected Letters 1917-1961*. Edited by Carlos Baker, Granada Publishing, 1981.
- . *True at First Light*. Scribner's, 1999.
- Jenks, Tom. "The Garden of Eden at Twenty-five." *Hemingway's The Garden of Eden: Twenty-five Years of Criticism*, edited by Suzanne del Gizzo and Frederic J. Svoboda, Kent State UP, 2012, pp. 1-12.
- Kennedy, John F. "Statement by the President on the Death of Ernest Hemingway." *The American Presidency Project*, <https://www.presidency.ucsb.edu/node/235021>. Accessed May 13, 2024.
- Lynn, Kenneth S. *Hemingway*. Harvard UP, 1987.
- Mazzeno, Laurence W. *The Critics and Hemingway 1924-2014: Shaping an American Literary Icon*. Camden House, 2020.
- Meyers, Jefery. *Hemingway: A Biography*. Harper & Row, 1985.
- Modellmog, Debra A. *Reading Desire: In Pursuit of Ernest Hemingway*. Cornell UP, 1999.
- Modellmog, Debra A., and Suzanne del Gizzo, editor. *Ernest Hemingway in Context*. Cambridge UP, 2013.
- Putnam, Ann. "Race and Ethnicity: Cubans." Modellmog and del Gizzo, pp. 332-38.
- Reynolds, Michael. *Hemingway: The Final Years*. Norton, 2000.
- . *Hemingway: The Homecoming*. Blackwell, 1992.
- . *Hemingway: The Paris Years*. Blackwell, 1989.
- . *Hemingway: The 1930s*. Norton, 1997.
- . *The Young Hemingway*. Blackwell, 1986.
- Spilka, Mark. *Hemingway's Quarrel with Androgyny*. Nebraska UP, 1990.
- Strong, Amy L. *Race and Identity in Hemingway's Fiction*. Palgrave, 2008.
- Strycahc, Thomas. *Hemingway's Theaters of Masculinity*. Louisiana State UP, 2003.
- Vernon, Alex. "War, Gender, and Ernest Hemingway." 2002. *Hemingway: Eight Decades of Criticism*, edited by Linda Wagner-Martin, Michigan State UP, 2009, pp. 91-114.
- Wagner-Martin, Linda. *Ernest Hemingway: A Literary Life*. Palgrave, 2021.
- Wheeler, Robert. *Hemingway's Havana: A Reflection of the Writer's Life in Cuba*. Skyhorse Publishing, 2018.
- Young, Philip. *Ernest Hemingway*. 1952. Pennsylvania State UP, 1966.
- 柴山哲也 『ヘミングウェイはなぜ死んだか——「老人と海」の伝説 二十世紀の文豪の謎』 集英社、1999年。
- 島村法夫 「『老人と海』」 『ヘミングウェイ大事典』 今村楯夫・島村法夫監修、勉誠出版、2012年、29-32頁。
- 高野泰志 『引き裂かれた身体——ゆらぎの中のヘミングウェイ文学』 松籟社、2008年。

- 「ヘミングウェイと FBI ファイル——ファイルの空白に見る隠された素顔」『アーネスト・ヘミングウェイの文学』今村楯夫編、ミネルヴァ書房、2006年、206-40頁。
- 塚田幸光『クロスメディア・ヘミングウェイ——アメリカ文化の政治学』小鳥遊書房、2020年。
- フェアバンクス香織『ヘミングウェイの遺作——自伝への希求と〈編纂された〉テキスト』勉誠出版、2015年。
- フエンテス、ノルベルト『ヘミングウェイ——キューバの日々』宮下嶺夫訳、晶文社、1988年。
- 古谷裕美『ヘミングウェイと逸脱した身体——権力・棄却・ジェンダー』関東学院大学出版会、2022年。
- 前田一平『若きヘミングウェイ——生と性の模索』南雲堂、2009年。
- 宮本陽一郎『モダンの黄昏——帝国主義の解体とポストモダニズムの生成』研究社、2002年。
- 吉川純子「冷戦と『男らしさ』という幻——ヘミングウェイのメディア・イメージ」『憑依する英語圏テキスト——亡霊・血・まぼろし』福田敬子他編、音羽書房鶴見書店、2018年、159-81頁。

註

- ① 1960年から70年代にかけて、Judith Fetterly などがフェミニズムの観点から Hemingway の作品を論じる。“If we explore the attitude toward women which is behind A Farewell to Arms, we will discover that, despite such ringing phrases as ‘idyllic union,’ ‘their Swiss idyll,’ ‘growth to a genuine commitment,’ it is one of immense hostility, whose full measure can be taken from the fact that Catherine dies and dies because she is a woman” (Fetterly 117). ここに引いた Fetterly の分析では Hemingway の女性表象におけるミソジニーが指摘されるが、同様のアプローチは後続の研究に批判的に受け継がれた。
- ② この時期の研究で最も盛んに論じられたのは伝記研究である。本文中で挙げた伝記のほかにも、Jefery Meyers の *Hemingway: A Biography* (1985) や Michael Reynolds の五部作の伝記 *The Young Hemingway* (1986)、*The Paris Years* (1989)、*The American Homecoming* (1992)、*The 1930s* (1997)、*The Final Years* (1999) が出版された (前田 18)。
- ③ Comely と Scholes の議論のなかでも、Hemingway が描く性の変容それ自体が、人種の変容とも結び付くという主張は重要である (95)。例えば *The Garden of Eden* では、白人女性である Catherine Bourne の強く日焼けした肌が、彼女が抱くネイティヴ・アメリカンへの憧れとして示される。いわば人種的な越境願望を抱く彼女が、その姿で夫の David と交わる場面には、性的役割の交換までもが含意されている。このように Hemingway が描いた性規範の逸脱と同様に、人種の表象も盛んに論じられてきたテーマの一つである。
- ④ Hemingway のテキストでは性的欲望が複雑に描かれるのと同時に、ジェンダー・アイデンティティが流動的になる (Chakkraverty 193) と論じる点では、近いテーマを扱う研究にとって重要な先行研究になりうる。
- ⑤ 吉川純子の「冷戦と『男らしさ』という幻——ヘミングウェイのメディア・イメージ」(2018)では、Hemingway 自身とメディアが共謀した男らしさのイメージ戦略について、冷戦初期たる第二次世界大戦後から Hemingway が猟銃自殺を遂げる1961年までの期間を対象に議論が展開される。吉川は Hemingway とかわりの深かった雑誌である *Esquire* や *Playboy* を取り上げ、それらのメディアがアメリカ人男性、とりわけ白人中産階級の男性にいかに関与したのか、冷戦初期のアメリカ社会における男らしさのイメージの推移を論じる (160-81)。
- ⑥ ジャーナリストの柴山哲也は高野と異なり、FBI ファイルを多数引用する。柴山の論じるところによると、FBI の調査対象になった Hemingway は、伝記にも明らかなように、通常のアメリ

カ人とは異なった人生を送っていた。パックス・アメリカナ、つまり超大国へと踏み出し、他国に対して干渉し、軍事力を行使するアメリカが正しいアメリカとして是認されるなら、Hemingway の自由主義思想は非米的であると論じる (180)。